

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	言葉を育てる・言葉が育てる : ハンブルグ日本人学校での経験を経て、今、伝えたい言葉
Author(s)	平野, 陽子
Citation	国語教育思想研究 , 32 : 352 - 361
Issue Date	2023-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054837
Right	
Relation	



言葉を育てる・言葉が育てる
—ハンブルグ日本人学校での経験を経て、今、伝えたい言葉—

名古屋市立玉川小学校 平野 陽子

キーワード：言葉、学級通信、ライフヒストリー

1、はじめに

1994年～1996年に、愛知県立大学文学部児童教育学科の難波研究室で学び、1998年より名古屋市の小学校教諭として勤務している。最初の7年間、名古屋市の小学校に勤務し、その後、2006年度から2008年度までドイツのハンブルグ日本人学校に3年間勤務した。その後5年間を名古屋市の小学校にて勤務した後、2014年・2015年の2年間、兵庫教育大学教職大学院授業実践開発コースで学び「基本的自尊心を価値づける授業のあり方—表出されていない言葉を育む国語科授業を手がかりとして—」をテーマに、学修の成果を修めた。大学院修了後は、教務主任として名古屋市の小学校で7年間勤め、現在に至る。本稿はハンブルグ日本人学校での教育実践を中心に据え、その前後の名古屋市での教育実践を振り返りながら、今、教師として伝えたい言葉を紡ぎ出すものである。国語教育研究においても、資料をもとに個人史・個体史研究が行われているが、本稿も、そうしたライフヒストリー研究の一つとして位置付けたい。具体的には、教育実践の主軸でもあった学級通信を資料として、その時どんな思いで、どんな子どもたちに、どんな言葉を伝えていったのか、整理と考察を行う。

その上で、2023年度に教頭職として学級担任を外れた今、子どもたちと子どもたちを囲む多様な立場で関わる学校関係者の皆様に対して、伝えたい言葉を記録してみたい。

2、学級通信にみる言葉の変遷

学級通信は、年度の最後に冊子体にまとめ、1年間を振り返ることができるようにして文集を製本し子どもたちに配布してきた。その冊子の冒頭には、前書きを記載しており、そこにはその1年間の担任として子どもたちに伝えてきた、思いや進級する子どもたちへの励ましを伝えるための言葉が示されている。

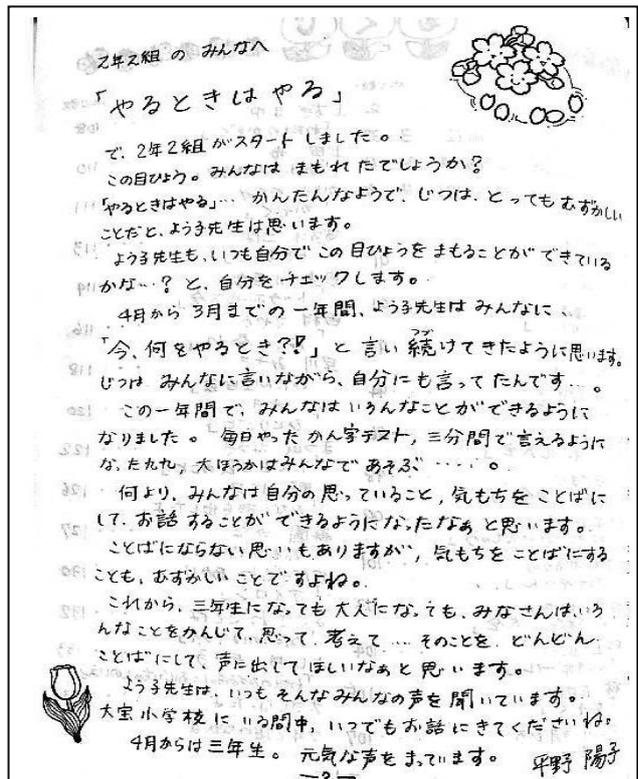
そこで本稿では、その前書き部分を抽出し、そこで示された担任として学級の子どもたちに伝えてき

た教育観や進級する子どもたちへ励ましとなるように願って示した言葉の変遷を辿っていきたい。

2、1 ハンブルグ以前の学級通信

初年度の担任は、2年生。改めて、文集を読み返すと、自分の知らない自分がいました。まずは、一人称の表現について。子どもたちから、「陽子先生」と呼ばれていたこともあり、私の話を聞いているかのように2年生の子どもたちに、読んでもらいたいと考えていたことを、思い出しました。

「やるときはやる」「今、何をやるとき?」「気持ちを言葉で表現してほしい」この3点が、進級する子どもたちへのメッセージの要旨であると、捉えることができます。



【資料1 1999年度学級文集「たいよう」前書き】

自分自身が、小学1年生の時、担任の先生は学級通信を毎日書いていました。その通信やその先生がすごく好きだったので、教師となった私自身も書いてみようと思い、書き始めました。最終号では、相

最終号はNo.171 でした。200 日ほどの授業日ですから、ほぼ、毎日学級通信を発行していたことが、分かります。文集の前書きにも学級通信の最終号にも、3 学期はあっという間だったと捉えることのできる表現が並んでいます、職場で、私自身の役割が増えてきたのも、この頃からです。

3 年目は、6 年生。初めての卒業生を担当します。本当に、私でいいのだろうか。校務分掌では、体育主任を拝命し、運動会や部活動など、学校全体や学年を超えた活動を取りまとめることとなりました。

その一方で、初めてだからこそ、全力で一生懸命に頑張りが続けたことができたとも思います。知らないからこそ、できたことかもしれません。「一生懸命な姿は人を感動させ、自分を成長させてくれます。そして、頑張っている自分のことをもっともっと愛することができるようになります」と、一生懸命を自己愛へとつなげています。高学年ならではの、自己否定や諦めの気持ちを、もってほしくなかったのです。できること、できないことあるけれど、頑張った自分は誇ってよいと思うのです。そんな気持ちを、子どもたち自身にももってほしいと願いました。

はじめに

2001年4月。
「6年1組の担任です。」



そう、校長先生に教えられた日から卒業の日までが、とても長い一年になるのだろうか・・・。それとも、あっという間の一年になるのだろうか・・・。

始業式の朝、みんなの前に私が初めて立った時の、みんなのちよっぴり「にやっ!」とした雰囲気、覚えています。同じように、私も「ふふっ!」と思ったから。

29人+1人でスタートした6-1。手さぐりのスタートでした。部活や委員会、クラブで顔と名前を知っている子は何人かはいましたが、ほとんどの子が初対面なのです。5年生からクラスがえがあつたみんなも、その気持ちは同じだったのではないのでしょうか。そして、そんな初対面のみんなに、陽子先生はきっと、今までにないたくさんのお話を押しつけたかと思えます。

* リーダー制	* おかわり券
* 忘れ物ゼロカード	* 大放課はクラス全員で遊ぶこと
* 毎日の漢字テスト	* 朝の1分間スピーチ
* 係会議	* ニックネーム

これらは、その中のほんの一部にすぎません。時には、「どうしてそこまでこだわるの?」と思ったことがある人もいたんじゃないかなあと思っています。それでも、みんなは私のこだわりと共に1年間、一緒に教室で生活し同じ時間を過ごしてきました。

この出逢いは、一つの奇跡なんだ!と思わずにはいられません。みんなにとっては、最後の小学校生活。陽子先生にとっては、教師生活初めての卒業生。どうしても、思い入れが強くなってしまっていました。私のハートはいつでも真っ赤っかに燃えている!それでも、その熱さにだけ一人やけどすることなく、6-1は熱いクラス!で盛り上がりだんじやないかな?と思います。みんなのハートの熱さは、特に、修学旅行、運動会、学芸会などの学校行事から、ピン!ピン!伝わってきました。

一生懸命な姿は人を感動させ、自分を成長させてくれます。そして、頑張っている自分のことをもっともっと愛することができるようになります。みんなには、いつでも、どんな時でも、まっす!一番に!素直に!自分のことを愛せる人であってほしいと思います。そのためには、いつもあな達の心の中にある「情熱」を持ち続けてください。真っ赤っかに燃やし続けてください。心から自愛の心を持って、輝き続けてください。

希望という光りに包まれて旅立つ、6年1組のみんなへ。愛を込めて。
2002年 3月 吉日 平野陽子



6-1 学級通信 これが、本当の...
Final 最終号
2002年3月19日
ファイナル
大宮小中学校 卒業おめでとう。

希望の春
2002年3月19日
最終号

ありがとう
おめでとう
卒業おめでとう

【資料6 2001年度学級通信「Final 最終号」】

文集の帳合いは、子どもたちが自分で行い、「一文字目標」「寄せ書き」など、自分だけのページをいくつか差し込み、製本しています。最終号のページは白紙のまま印刷し、最終日に渡して、後から張り付けて完成させます。最終日の前日には、各自自宅へ持ち帰り読み返していると信じて、1 年を振り返っている姿を想像しながら、最終号を書いています。例年と異なり、6 年生ですから、4 月から同じ校舎で会うことはありません。一緒に授業をすることはないので。この最終号を書いた時の気持ちは、本当によく覚えています。今書いている、この言葉が学級の子どもたちに残す最後の言葉になるのだと。6 年生を懐かしく思い出してほしい気持ちと同等に、振り返ることなく中学校生活、高校生活を突き進んでほしいという思いもありました。決まっていなくてもや分からないことが不安なのではなく、楽しみに感じてもらいたいと、願いました。

4 年目は、5 年生を担当しました。40 人在籍している、2 学級の学年でした。教室内が、いつもにぎやかでした。学級通信のタイトルは「Big Wave」を選びました。

【資料5 2001年度学級文集「Final」前書き】

経験年数3 年目で、6 年担任と体育主任(部活動)を担当することとなり、「本当に、私できるのかな」と心配になり、学年主任の先生に相談したことを覚えています。最高学年の子どもたちに、担任として何ができるのか、何を伝えたいのかを、いつも考えていたように思います。今思えば、独りよがりな指導や声掛けもあったのではないのでしょうか。独りよがりを自覚し、自戒の念も込めて「時には、「どうしてそこまでこだわるの?」と思ったことがある人もいたんじゃないかなあと思っています。それでも、みんなは私のこだわりと共に1 年間、一緒に教室で生活し同じ時間を過ごしてきました」とつぶづっています。

はじめに

「心のコップは上向きに」

これは、陽子先生がこの一年間5-2のみんなと一緒に目指していきな！と5年生が始まる最初に考えた学級目標です。この一年間で、君達自身のコップは、どのくらいいっぱいになりましたか？せつかく入ってきそうになった物をこぼしてしまったり、最初から受け入れようとしなかったりしたことはありましたか？

そして、この一年間、私のコップはちやあんと上を向いていたのだろうか？・・・と、振り返ってみました。いつも！すべて！ではなかったかもしれませんが、たった一人・・・だったら、コップが下を向いてしまったままになることもあったかもしれません。でもね・・・そんなときには、必ず君達がいました。一人ひとりが精一杯、一杯、120%の力で5年生の199日を送ってきた、52の仲間がいました。そういう、頑張りができる40人の仲間がいました。そんなみんなと、共に過ごすことができたから、コップが伏たままになることはありませんでした。みんなが私を感じようとしていることが、とてもよく分かったから、伝わってきたから。

「別れ」は「出会い」の始まりです。この5-2のメンバーで過ごした5年生は二度とは戻ってこない。だけど、この1年間があったからこそ、次の1年をまた迎えることが出来るのだと思います。今が精一杯だからこそ、次が輝いているのだと思います。そして、そんな風に輝いているみんなには、きっと！すべて！が待っている」と陽子先生は書いています。
「よい出会いは人間を変える」5-2のみんなには「心のコップを上向きに」して、すべての出会いが、自分にとって「よい出会い」になると信じていることのできる人間になってほしいな！と思います。そのためには、君達自身が自信をもって☆輝いて☆いてください。世界にたった一人しかいない自分自身を好きでいてください。愛していてください。陽子先生は、自分のことを好きになれない人や愛せない人が、他人のことを大切にしたり好きになっただけでいいんじゃないかなあと思っています。いつも、自分を好きでいることが出来るように、自分を輝かせてください。自分自身を輝かせることが出来るのは、世界中でたった一人・・・「自分自身」、なのでです。
きらきらと輝いている40人のみんなへ。愛を込めて。
2003年3月吉日 5年2組担任 平野陽子

【資料7 2002年度5-2学級文集「Big Wave」前書き】

5年生という学年は、学年としても成長期としても、立ち位置がはっきりしない学年である印象がありました。また、学級内の人数も最大人数の40人でしたから、本当に個性豊かです。人数が多かろうと、少なかろうと、子どもたち一人ひとりと向き合うことに変わりはありません。とはいっても、人数が多いと、どうしても見逃してしまったり、聞き漏らしてしまったりする場面があるかもしれません。そんなことを思いながら、それでも、学級担任としての思いや考えはきちんと伝えたいし、子どもたちみんなの言葉をしっかり受け止めたいと、思いました。そんな担任としての思いを込めて、学級目標は「心のコップは上向きに」としました。子どもたちには、資料6：前書きの中で、「「よい出会いは人間（ひと）を変える」5-2のみんなには「心のコップを上向きにして」、すべての出会いが、自分にとって「良い出会い」になると信じていることのできる人間（ひと）になってほしいな！」と思います。そのためには、君達自身が自信をもって☆輝いて☆いてください。世界にたった一人しかいない自分自身を好きでいてください。愛していてください。」と、伝えていきます。

Big Wave

5年2組の40人のみなさん、5年生の卒業、春が近づいてきました。4月からの1年間、本当に早く、たたくさんの行事を一つ一つ終えていって、君達もはかばかしく成長していきな！

保護者の皆様へ
一年間、大変お世話になりました。担任として、いろいろな点で、ご迷惑をおかけしたことも多かったことと、お詫言わせておきます。また、ご協力いただき、ありがとうございました。
4/4(金)入学式準備 9:00 始
4/7(月)入学式
希望の春

【資料8 2002年度学級通信「Big Wave」最終号】

また、学級通信「Big Wave」最終号では、「一人で頑張り続けることは本当に難しいことです。家族や学級の仲間がいるからこそ、力一杯頑張ることが出来るのだと思います。5年2組は、そんな風に頑張る力（パワー）をもった40人だったなと陽子先生は思っています」と、修了式の日読んでほしい言葉を記しています。

最大人数だからこそできること、感じることを言葉にしておきたかったのです。とかく、たくさんで大変だよね・・・というような、声を掛けられることの多い学年だったからこそ、全員を大切にしていたのです。

また、学級文集には必ず、寄せ書きのページを作っていました。全員がクラス全員に言葉を寄せます。もちろん、その時は、担任である私自身にも書いてもらいます。そのページは、その人個人のオリジナルのページになります。たいいてい、修了式の前日か、前々日かというような、学年末間際の日程で書きあげていました。その時のことを、学級文集で「みんなからの一言一言がうれしかったです。今日で52（ゴツ）は卒業です。この一年間の頑張りを自信に思って、最高学年への一歩を踏み出してください。陽子先生は、そんなみんなのことをいつも応援しています！」と、最後の文章で書いています。「応援」という言葉が出てきた最初の学年です。子どもと同じ時、同じ場所で成長する担任の視点から、少し離れた場所での教師としての立ち位置に気が付いた頃です。

5年目は、初めての1年生を担当しました。3学級あり、学年主任の先生を中心に、学級担任3人でわいわいと話しながら、学校行事や授業準備を進め

ていました。特に、この年は、道徳の授業公開があり、授業研究だけでなく、環境整備も併せて様々な計画を立てていました。

はじめに

「文しゅうって何かわかる？」みんなにきいてみたら、う〜ん(◎_◎) ちよっとこまっている子が、たくさんいました。

よう子先生は、いつもクラスで一年のまとめとして文しゅうをつくっていきま。さく文をのせたり、じぶんのページをかいたり、よせがきをかいたり・・・

今年もいつもとおなじようにつくりたいなあとおもったので、みんなにきいてみました。「おねえちゃんを見たことあるからしってるよ。」とおはなししてくれた子もいましたね。これまでにつくった文しゅうを見せたら「おもしろそう!」とよろこんでくれましたね! とってもうれしかったです。

下がきからかいて、「あいうえおのうた」をかかんがえて、えをかいて、よせがきをして・・・そして、できあがったのがこの「学きゅう文しゅう のびのび」です。1年1くみ:21人です。そした一年かんのおもい出がぎっしり! つまっています。おともたちのページや一学きからの小さくなった「学きゅううつうしんのびのび」を、すみからすみまで、じっくりよんでほしいなあおもいます。

みなさんは、この一年かんでたくさんのごとができるようになりましたね。なわとび、かん字、けいさん、ボール投げ、そうじ、竹うま、ブリッジ・・・まい日、「きょうはなにをやるの?」「こんどは、あたらしいところだね!」と目をきらきらとかがやかせながら、むねをどきどきさせているみんなと、いっしょに学しゅうすることができてよう子先生も、ヤル気がぐんぐんわいてきました!!(〇)

じぶんのページをかいているときに、「できるようになったことがあ・・・」とちよっとえんぴつがとまってしまいました。なんだろう?? それにくらべて、1-1のみんなはえらぶのにこまるくらいありましたね。いっばいがんばったんだね! とうれしくなりました。

1-1のきょうしつはがんばるみんなのパワーがまんたん! でした。大きなこえて「おはようございます!」大きな口で「いただきますーす。」はんせいするときは「こめんなさい。」とえがおとあかるいわらひごえがあふれていましたね。そんなみんなに、この一年かんとおして、「あい手にとどくように、おはなししようね。」「文しゅうで、おはなししようね。」ということをつたえてきたつもりです。

どうぶつの中で、人げんだけがつかうことができるもの。それは、「火とことば」です。よう子先生は「じぶんのことはじぶんでおはなしすることができる子になってほしいと、おもっています。だまっています。あなたたちのところの中にある気持ちをつたわらないことのおぼろげなおいとおもいます。「なんとかして、つたえたいな。」「どうしたら、この気持ちをとどけることができるかな?」そんなふうにあい手のことをかかんがえながらじぶんのことをおはなししてほしいなとねがっています。

二年生になっても、まだいろんなおはなしをきかせてくださいね。みなさんのこえがとどくのをいつでも、まっています。

平成16年3月 吉日

1年1くみ たんにん ひらの よう子

【資料9 2003年度学級文集「のびのび」前書き】

小学校生活の中で、1年生は1年生なりの特別感があります。どんなことも、学校で行うすべての活動が、初めての経験になるからです。異なる生活経験を経て、同じ学級で生活する子どもたちは、1年間で本当に大きく成長します。もちろん、発達年齢的に、6歳だからできないだけ、というような内容の場合もあります。大人の当たり前と子どもたちのできた! という喜びは、似て非なるものです。

2003年度学級文集「のびのび」の前書きでは「「相手に届くようにお話ししようね。」「文章でお話ししようね。」ということ伝えてきたつもりです。」と、常日頃から声を掛けてきたことを、記しています。他にも、1年生の子どもたちは、自分の気持ちや感情をきちんと話さなくても、伝えなくても先んじて対応し周りの大人に助けられ、悲しい気持ちや納得のいかない感情を「泣く」ことで表す場面も多くあります。

また、「自分のことは、自分でお話することができる」子になってほしいと、思っています。だまっ



【資料10 2003年度学級通信「のびのび」最終号】

ていては、あなたたちの心の中にある気持ちは伝わらないことの方が多いと思います。「なんとかして伝えたいな」「どうしたら、この気持ちを届けることができるかな?」そんなふうに関心することを考えながら自分のこととお話ししてほしいな」と書いています。日々の子どもたちの様子を見て、一緒に生活をしていく中で出てきた言葉です。気持ちや考えが伝わらないことがあっても、言葉で伝えることを諦めないでほしいと思っているからです。

学級通信「のびのび」最終号では、「二年生になっても、ずーっと頑張る21人でいてください」と、書きました。全員が頑張る力をもっていると、信じてきたこと、担任としての子どもたちへの言葉です。当時も今も、「どの子どもも頑張る力をもっている」という、その考えに変わりはありません。

名古屋市では新規採用後6年間同一校に勤務したあと、配置換えとなります。初任校で最後となる6年目は、3年生を担任しました。学級通信のタイトルは「オレンジ」。元気あふれる子どもたちのイメージ色です。7年目は、転勤して1年間だけ在籍し、翌年には在外教育施設にて勤務することになっていました。在籍はするものの、翌年には転勤することも決まっている複雑な心境の1年間が始まりました。福田小学校分校では、2学級の5年生を担任することになりました。

学級通信を書いてもよいかどうかは、職場ごとの判断となります。幸いなことに、新しい職場の学年主任や教務主任の先生をはじめ、教頭先生、校長先生にも学級通信の配布をご快諾いただくことができました。平成17年度の学級通信は「Love Letter」をタイトルとして、子どもたちへ伝えたい言葉を書き残しました。次に、高学年を担任したら「Love Letter」をタイトルにしようと、決めていました。

2、2 ハンブルグ日本人学校での学級通信

ハンブルグ日本人学校は、幼稚部、小学部、中学部合わせて120人程度、全学年単学級です。ハンブルグ日本人学校は、在外教育施設ですから、日本の学習指導要領にのっとって授業を進める部分と、ドイツの法律にのっとって、施設管理や行政通知を進める部分の両面があります。また、教職員も、文部科学省派遣教諭、現地採用教諭、現地採用職員等があります。給与面や待遇等も異なります。学校独自の敷地と校舎があるものの、一部はインターナショナルスクールとの共用部分もあります。

赴任1年目は、3年生を担当しました。ハンブルグ日本人学校では、毎週末に次週の予定を伝えることを主旨として学級通信を発行することになっていました。この学級通信に、これまでの学級だよりで書いていた内容や思いを追記するような形で、ハンブルグでの学級通信を作成することにしました。お願いや連絡のような内容も多くありますので、手書きというわけにはいかず、ハンブルグでの3年間はパソコンで作成した学級通信となりました。その分、写真を有効的に活用するようにしました。学級文集作成では、国語や学級活動の授業を活用し、作文形式や自己紹介、振り返りカードのような内容で、年度末にまとめました。

ハンブルグ日本人学校の特色として、小学部1年から、ドイツ語と英語の授業があり、教科担任制である点が挙げられます。授業時間が多くありますから、子どもたちは結構忙しいです。担任の方も、学級の子どもたちと1日中ずっと一緒に過ごしているわけではありません。短い時間の中で、ぎゅっと濃縮された時間を過ごしたように思います。文科省の派遣期間は、短くて2年、最長でも4年しかありません。子どもたちも自分の意志とは関係なく、保護者の転勤等で、転居や転校、帰国など、大きな環境の変化を余儀なくされます。今この時、この人たちの出会い、過ごす時間を大切にしたいと思いました。もう2度と会えないかもしれないからこそ、より一層大切にしたいと思うのです。

ハンブルグ生活2年目は、6年生を担当しました。中学部の先輩方も一緒に生活し、行事などを合同実施することもあるものの、小学部の最高学年です。この一年間で、子どもたちに一番伝えたいことは何だろうかと考えて、2007年度ハンブルグ日本人学校第6学年の学年だよりのタイトルは「夢」と決めま

した。「将来どんな大人になりたいか」「何をしたいか」大きな夢、小さな夢、身近な夢、壮大な夢、どんな夢でもいいのです。夢が変わってもいいのです、「もっていてほしい」未来を担う子どもたちへの願いです」と、タイトルを決めたときの考えを、国語の授業で作成した本の1ページに表現しています。

また、6年生の子どもたちだからこそ伝えたいと考えて、学級通信に「今日の一言・一コマ」コーナーを設けました。連絡やお願いの内容が多くなりがちな通信に、何かできる隙間を探した結果です。学級通信最終号の「今日の一言」は、「旅立ちの日に…夢」6人の思いを言葉にしてつむいだ「卒業生の言葉」。今日の日を礎に、地に足をつけて、しなやかに「夢」に向かってほしいと思います。」としています。

また、学年だより最終号を、以下のように書いています。

夢

ハンブルグ日本人学校
小学部6学年 学級通信
2008年3月13日(木)
最終号

今日の一言「旅立ちの日に…夢」
6人の思いを言葉にしてつむいだ
「卒業生の言葉」。今日の日を礎に、
地に足をつけて、しなやかに「夢」
に向かってほしいと思います。

★ 卒業 おめでとう ★

ついに、私たちの201日目が終わりました。「4月11日(水)の出会い記念日」から、200日を共に過ごしたことになります。「200回積み重ねた私たちの全てを、家の人や地域の方、他学年のみなさんに卒業式でみてもらいたい！」そんな気持ちで、心一つにして卒業に向かってきました。小学校6年生は、毎日が卒業に向かうカウントダウンでした。全てが小学校で行う最後の〜でした。「最高学年」を意識してほしい、という話もよくしたと思います。6人の君たちは、その期待に応えようと、一生懸命努力しました。言葉で語らなくても、君たちの行動がそれを表していました。本当によくがんばりました。最高の6年生です！

昨日、図工室でみんなの発表を独り占めで聞かせてもらって、私は本当にうれしかったです。思わぬうらやみと涙が出てしまいました。君たちが自分の言葉に思いを込めているのが、しっかりと、伝わってきました。校長先生が「感動をもって卒業式に臨んでほしい」とおっしゃってくださいましたね。今夜は、ぜひ自分の中の感動を味わってほしいと思います。卒業を祝して、最高の6年生にこの言葉を贈ります。

写真



<4月10日(木)の予定>

8:35	通常登校
中学部一年の教室へ	
8:40	学活 (座席、式次第、入場方法等について確認)
8:55	体育館へ移動
9:00	番任式・始業式
9:20	式歌の練習
9:40	トイレ休憩
9:50	入学式
10:40	写真撮影→教室へ
11:10	学活①
12:00	学活②
12:20	昼食
13:00	下校

○ 保護者の皆様へ ○

本日は、お子様のご卒業、本当におめでとうございます。一生懸命で明るく優しい子ども達と共に過ごすことができ、本当にありがたい1年間でした。至らない点も多かったかと思いますが、いつも温かく見守り、応援してくださってありがとうございました。保護者の皆様のご理解とご協力あつて、学級であつたと思います。こんなにしていたいために、私はどれだけのことを子ども達に運ぶことができたのだろうか〜もつと、できたことがあつたのでは〜と、申し訳なく思う一方で、どこまでも伸びていく子ども達にたくさん感謝させられました。

最高の子ども達と過ごせたこと、心より感謝しております。1年間本当にありがとうございました。

【資料11 2007年度 学級通信「夢」最終号】

修学旅行や運動会、卒業式など、全ての学校行事で最高学年として輝いてほしい、そんな思いで過ごしました。

2016年度より担任としての職務を離れ、教務主任として、学校全体の教育活動を円滑に進める立場となりました。改めて、言葉と向き合う、言葉で伝える難しさを感じました。

3、教務主任としての言葉

(1) 話し手として

打合せや会議等で、全教職員に理解してもらいたい内容を、短時間で伝えなければならない場面は多くあります。「教務主任としての言葉」は、具体的な指示や手順ばかりでなく、目指したい姿や目標をあえて言葉に表して再確認するように示すことで、職員を励ます役割を担う一面もあるように思います。

例えば、「子どもが一番。子どもファーストで考えましょう」と、ネガティブな言葉や理不尽な要求に惑わされないように、教職員全員で前向きな一歩を踏み出すことができるような一声を掛けることにも、留意しました。

また、職員数が50人近い職員室では、誤解なく、全員に理解されることが必要であり、5W1Hは明確にして伝えることや、必要な期日をはっきりと示し、誰が何をどうしたのかを、きちんと述べることに気を付けました。そうすることで、行間を読んで対応してほしいというような、暗黙の了解的な部分は、少なくなると思ったからです。

全校の子どもたちには、毎日掛ける言葉はどんなものがよいかと考えると、毎朝校門で「おはよう。元気かな」と、両手を振って迎えるようにしています。マスク越しであっても、目が笑っているように、「元気に来たね。頑張って歩いてきたね」「歩くと暑いよね」「手が冷たくなるよね」と、近くても遠くても、歩いて登校している子どもの気持ちになって、声を掛けます。私自身も最寄り駅から2kmほどの道のりを歩いて通勤しているため、子どもたちの状況がよく分かります。実際に体感している暑さや寒さに寄り添った声掛けになるよう、気を付けていました。

それとともに、生徒指導上の言葉として、登校しぶりや不登校の子どもたちへの声掛けや対応も多くあります。まずは、「頑張ったね。よく来たね」「会えてうれしいよ」と、今、その時に、登校したこと、学校に足が向いたことを「うれしく思う」と伝えます。本当に、心からそう思うことが必要です。発した言葉には、気持ちをのせることが大切です。気持ちは、言葉を通して相手の心に伝わります。

(2) 聞き手として

子どもたちの言葉をどう聞くか、保護者の声を、どう聞くかが大切かと思えます。

特に、教務主任として学校運営に関わる際、苦言や要望である場面は多くあります。様々な要望を受ける際、気を付けていることは、「主訴は何だろう」という点です。声の大きさや、抑揚に惑わされることなく、一番訴えようとしていること、話し手の本心をつかむことが大切だと考えています。

「主訴」を聞き取ることができるかどうか、「主訴」をつかむことができるかどうかは、聞き手の想像力や経験値、相手への寄り添い方による部分もあるかもしれません。その一方で、保護者や地域の方など、訴えている人は何らかの形でそれを「言葉」にしている場合が多くあります。

「相手に伝えてもらいたい」「どうなったか、報告してほしい」「情報を共有してもらいたい」等、何を求めているかを、会話の中で見極め、聞き返したり、繰り返したりして、確認していくことが大切です。

様々な場面で泣いている子どもたちに対応する場面も多くあります。そんなときは、「ちゃんと聞かせて、泣いても解決しないよ。」「泣き止んだら、話を聞くよ。」と顔を正面から見て、背中や手をそっとさすり、ゆっくり問い掛けます。「泣くと、疲れるからね。お茶飲んで」「さあ、涼しいところにいこう」「こっちで、聞こう。暖かいよ」と、聞く場所を確保します。

「言葉」が解決の方策であることを、子どもたちに身をもって味わわせることが大切です。言葉と体はつながっていて、直接的につながったと感じたときの言葉の力は、心を動かし、体を動かす大きな原動力になります。

(3) 書き手として

「書き手」としての業務は、保護者向けの各種おたよりや教職員向けの手順書などを作成する場面が主となります。保護者向けのたよりの場合、丁寧な言葉や言い回しで書き過ぎることで、かえって、情報量が多くなり、内容が分かりにくくなる場合があります。

例えば、このたよりで何を伝えたいのか、間違っていて読み取られてしまっていていけないことは何か、などの要点を押さえることは、まず大切です。そ

の上で、保護者の目線で読み直すことも必要です。授業参観時の留意点等は、時系列で示すようにし、保護者が入校してから順にたどる場所で気に留めていただきたいことを、箇条書にするようにしていました。

そして、気を付けていても、間違えることもあるのですが、「数字と名前は、間違えたらだめだよ。刷り直しね」と、ご指導をいただきました。数字とは、日付や時間、金額を示している場合が多いです。また、名前もその人、個人や役割を特定します。間違っているということは、その人の存在、尊厳に配慮をしていないという学校の姿勢にも、つながります。ですから、数字や名前が間違った場合は、きちんと訂正する文書を示すこと、労を惜しまず対応することが大切でした。

(4) 読み手として

校内では、初任者研修を始め、各種のレポートや通知表に示す所見、学年だより等を読む場面が代表的なものになります。教務主任という立場を通した読み手は、まず、内容よりも、書式は合っているか、形式は整っているか、期日に間に合っているかの確認が、優先されるように思います。通知表や学年だより等、複数学年が発出する文書は、形式や内容に齟齬がないかという点が、重視されます。学年としての書き手は、他学年と比較することはありませんが、読み手としての保護者は、兄弟等がある場合、他学年と比較することとなります。そのような家庭状況を想定して書かれているものばかりではありません。どうしても、該当学年の視点が中心となります。そこで、必ず、全学年を同時に読み比べるような手順を決めて、起案締め切り日を決め、必ず、全学年分そろってから、確認するようにしていました。

4、言葉が育てる

私自身に掛けていただき、教師としても深く影響を受けた言葉について、省察します。

(1) 強みを生かす

「強みを生かす、ですよ。強みですよ、強み」学校経営で大切な視点を、力強く指針として示してくださったのは、兵庫教育大学教職大学院学校経営コースの浅野良一教授の言葉です。学校経営戦略を練るにあたり、どんな素材があるのか、多方面から見る示唆を講義で学びました。とかく、小学校教育は「できないことができるようになる

こと」「分からないことが分かるようになること」が重要視されます。もちろんそれでよいのですが、それだけになると、子どもも大人も、伸び悩む部分が見えてきます。同じ素材、状況を見ているのですが、「足りない部分を見つけるのか」と「強みを見出して、生かすのか」とでは、発想に大きな違いが生まれると感じました。この発想の転換は、私自身に新たな価値観をもたらしました。

(2) 悪いと思ってる？

よかれと思って行動し、子ども自身や子どもを取り巻く状況より、担任としての思いや願いばかりを重視した対応や指導となっていた状況もありました。「よいことだ」「こうしてほしい」「いずれ、伝わる」と、思い込んでいるので、言動を自分自身で振り返ることが、少なかったように思います。私自身では解決できなかった際に、ご対応頂いた方から「悪いと思ってる？」と、一言、問い掛けられました。思わず口にした、そんな感じでした。自分自身を「悪い」とは、思っていなかったのだと、強く自省した一言でした。

5、終わりに

今でも「元気」や「勇気」をもらい、私の心を奮い立たせる言葉を記したい。ハンブルグ日本人学校で担任した児童が、修了式の際に一年を振り返り、全校児童の前で発表した文章である。「発表したいです」と立候補し「自分で書いた」と持参した原稿には、次のように書かれていた。

「18人でしか学べないこと 私は、今年たくさんのお話を四年生18人で学びました。四月の入学式の日。4年生の担任の先生が平野先生だと分かった時、少し、「え〜。」と思いました。「宿題、多いんだよねえ。漢字テスト、毎日あるんでしょ。」と、ちょっぴりどきどきしていました。でも、今は違います。漢字テストって、続けると面白いです。宿題って、そんなにいやなものじゃないな、と思います。学ぶことって、楽しいなと思うようになりました。「私だったら、こうやるのに」と思うこともあったけど、人によって考え方が違うことも学ぶことができました。五年生になったら、また、新しい先生と友達と何を学ぶことができるのか、今から楽しみです。今の自分の行動で未来が変わるのであるならば、今の自分の力で、せいっぱい頑張りたいと思っています。児童代表 小学部4年 M.S」